

田園都市の思想と 新田園都市

▼
ステファン・ウォード Stephen V. Ward
オックスフォード・ブルックス大学教授

ここでは、ステファン・ウォード氏の話を紹介する。彼は、ハワードの田園都市論の思想的な側面や国際的な影響についての研究の一人者であり、つくばと神戸でそれぞれ簡明な、しかし未来に向けた内容豊富な示唆を与えてくれる (Stephen Ward ed. "The Garden City - past, present and future" E and FN Spon, 1992)。 (要約: 荻原敬 ゴチックは発言部分)

1. ハワードの遺産

私は、単純だが、包括的な前提から出発したい。ハワードの田園都市の考えは、過去の世紀における計画に関するひとつの思想としては最も内容豊富なものである。この会議の出席者の大多数、特に仲間の講演者達は、この前提に大方同意と思う。計画という領域に関する傑出した論評者、たとえばルイス・マンフォードやピーター・ホールなどもこの見解を熱烈に支持しているの、私には良い仲間がいるわけだ。これに疑いを持つ人たちは、近代の計画に関する個別の革新が、全面的に、あるいは部分的にせよ田園都市思想に負っている領域がいかに幅広いかを考えてみて欲しい。

1898年に『明日 真の改革への平和な道』の出版によって始めて明らかにされたハワードの壮大な考えの中に、20世紀の計画の実践の中で鍵になる諸原則がいかに多く含まれていることか。土地利用の区分、マスタープラン、住宅の宅地計画、近隣住区の単位、ショッピング・モール、工業団地、階層別の道路計画、地域計画、計画的な分散、グリーン・ベルトなどなど。このリストをもっと増やし、もっと細かに分類していくことは容易である。

もちろん、実際にはこの本のオリジナルなメッセージの主要な部分は殆んど無視されてしまった。1890年代におけるハワードの総合的な意図は、広範な社会改革を、土地の協同的な所有によって達成することにあり、田園都市とはその上に築かれるべきものだった。これは何処でも実現できていない。この方向にある程度進んだのがレッチワース田園都市であり、そこまで行かなかったがウェルウィンも同類である。多くのニュータウン、衛星都市、その他政府機関によるさまざまな田園都市の変種の土地は、たしかに公有だった。

しかし、ハワードが夢見たのは、市民が共にコミュニティ (共同体) の土地所有者として、彼らの田園都市と運命共同体になることだった。彼が望んだのは、引き続き都市開発によって発生する地価の上昇分を協同して受益し、豊かなコミュニティ生活を築くための手段を得、それによって殆んど自動的に市民が活発に関与する地域民主主義の基盤が創造されることだった。いろいろと理由はあったが、それを守ることによって田園都市への投資が著しく阻害されることが主な理由となり、この偉大なビジョンの実現が出来ないことがわかってきた。そして、新しく定住地を開発して土地を所有した政府機関は、土地価格の増加によって得た利益をその機関に戻してしまった。非常に限られた場合を除き、コミュニティにそれが残ることにはなかった。

ハワードの田園都市は、もちろん、社会の変革のモデルにはならず、空間的な整備の変革のモデルにしかならなかった。

このように述べたうえで、ウォード氏は、結局ハワードの思想が最も包括的な影響を与えた側面を2つ上げている。ひとつは、「人間活動と自然との関係」もうひとつが「コミュニティの育成」である。

第一の面については、具体的に次のような提案がなされている。

各々の住宅に付属している個々の庭園があること、公園や運動場に大きな空間が割かれること、家庭菜園 (アロットメント)、田園環境との隣接、そして都市が大きくなりすぎて田園環境が侵食されることを防ぐ、注意深いコントロールなどである。隣接する田園環境は農業ベルトとして永久に維持されていなければいけない。

第二の点については、都市単位の人口規模

を3万と考え、さらに、それを人口5,000のクラスターに分けることを考えた。そして、働く場所や、遊ぶ場所を通してコミュニティの付き合いが高められ、また、さまざまな社会階層を受け入れることによって、社会的な緊張を生ませないように主張した。これらの考え方は、アメリカで近隣住区の思想の展開により、一見強化されたように見えたが、実際は、田園都市思想の協同組合的な姿勢、ボランティア性を大事にする伝統を忘れることにより、中身を失っていく。

都市開発はやがて、国家のあるいは企業の仕事となり、より専門的、企業的、トップダウン型になる。

しかし、このような方向への動きは、1960年代から始まって、21世紀の後半には、全ての先進資本主義国で、このような計画のスタイルに関して全面的な反乱が起こるのである。また、サステナビリティの合言葉の下に、都市開発を含むあらゆる人間活動において自然との関係を厳密に考え直すことが1980年代から始まる。

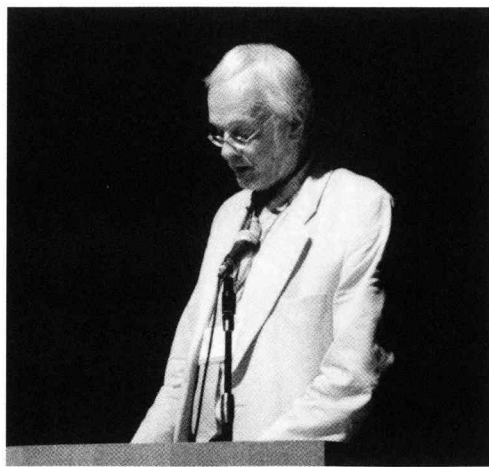
1960年代に始まるこれらの問題は、時代が違ふから違ふ言葉遣いで語っているにせよ、ハワードが既に指摘したことである。私たちはもう一度、近代都市計画の実践の中でハワードが与えた影響を確かめながら、ハワードの思想を反芻する必要があるのではないか。このような視点から、ウォード氏は世界各国における田園都市思想の影響を多数の人々と共に検証した結果を報告する。

2. 新田園都市のイデオロギー

神戸では、彼は過去の経験を離れ、現代の都市問題、新しい田園都市の思想について語る。ハワードの時代と現代では、100年の年月が経っていて、人間の定住環境を考える上で必要なさまざまな基礎条件が全く違ってきている。これをいちいち指摘した上で、では田園思想の下敷きの上でこれをどう考えたらよいか、大きな新田園都市の考え方を、結論として掲げる。

彼が挙げている、ハワードの時代と現代との差を簡単に列挙すると、次のようになる。

人口趨勢、世帯構成の差。特に女性の地位の変化による家族のあり方の変化。工業時代から知識産業の時代になり、雇用分布が都市の中心から拡散する。失業とパートタイム雇



講演中のウォード氏

用の増大。個人のモビリティの増大。消費の変化。ショッピングはそれ自身が自己目的化するが同時に在宅でのレジャー時間が増え、消費財の自宅内使用も増える。19世紀から20世紀にかけての産業や交通技術に支配されたコミュニティのあり方は大きく変容を遂げざるを得ない。

しかし、現代における地球環境問題、グローバル化に対応する地域有機農業の展開などを考えると、人間定住地と田園環境の再結合は不可避であると思われるし、コミュニティについても、特に高齢化社会の到来を考えると一層、多くの人が孤立無関心状態で生きるのではなく、直接的な利害関係者として、関与するコミュニティを創造していく、方が優れているという結論になる。

結論として、新田園都市が備えるべき条件を4つ挙げている。

第一に田園に囲まれた独立した小規模な田園都市という考え方は成立せず、大きな都市圏の中で公共輸送機関で結ばれた都市群ということになるし、多くの開発は田園地域でなく、既成の市街地の中で起こるだろう。ハイウェイを主な輸送機関とする交通体系は望ましくない。

第二に、比較的低密度だったかつての田園都市の密度に拘ることはない。もう少し高くなっても構わない。

第三に、活動的で、参加型で多様な階層を含むコミュニティの構築は依然として最も大事な目標である。このためには、ハワードが言うように、協同組合的な参加の仕組みが最も有効なはずである。

第四に、21世紀の最大のテーマは、サステナビリティであろう。世界的な人口爆発を考えると、最も貧しい人々に対しても有効な思想が必要だというのが最後の結論である。